

沖縄の思い文化・甦る首里城お水取り

NPO法人首里まちづくり研究会 沖縄南部風景街道パートナーシップ

1. はじめに

先の沖縄戦で失われた首里城は、正殿や城門が国宝として指定されており琉球文化の象徴でした。沖縄県民の悲願であった首里城の復元は、1992年（平成4）に、正殿を中心とする建築群や門などが再建された首里城公園の開園という形で実現し、以来3,500万人を超える方が訪れ、現在も引き続き復元整備が進められています。

また、2000年（平成12）には、首里城跡も世界遺産として『琉球王国のグスク及び関連遺産群』に登録されました。これにより、沖縄の歴史文化資源の価値が世界的に認められたとともに、我が国は、人類共通の貴重な遺産として未来永劫に引き継ぐ、重要な役割が課せられたと考えています。

現在も首里城公園や民間団体により、琉球文化にふれることができる行事が開催されていますが、失われた伝統行事などの「文化」は数多くあり、沖縄の自然と祖先を崇拝する伝統行事「お水取り」もその一つです。

2. 活動の背景・目的

■「お水取り」とは

「お水取り」は、首里城から約100km離れた沖縄本島北端の辺戸へ使者を派遣し、神人と共に拝所を巡り、由緒ある川から水を採り、その水を琉球王国時代は首里城へ、廃藩置県以降は首里尚家（中城御殿）へ献上していた儀式です。

琉球王国時代の古歌謡集「おもろさうし」に尚真王しょうしんおう（在位1477年～1526年）の謡が最古の記録としてあり、沖縄戦直前の1943年（昭和18）迄欠かさず、約450年間継承されていましたが、私達が取り組み始めた1999年（平成11）までの約60年間は途絶えていました。



■ 儀式の復活を通じた「自然を慈しみ、平和を重んじる文化」の伝承

1816年、琉球に来航した英船ライアラ号の艦長バジル・ホールは、セント・ヘレナ島でナポレオンに会い、武器のない琉球の話をする、「何を持って戦争するかと聞かれ、戦争もない」といってナポレオンをびっくりさせたといひます。

昭和に入ると、美術学者の柳宗悦は古都首里を訪れ、その印象を「日本第一の美しい都市」と表現しました。彼は、古都首里の都市美を「自然と歴史と人文のかくもよく保存されている希有な存在」と評し、「真に生きた庭園の都市」「人文の華を織りなした名園」と絶賛しました。

こういった、先人が育んできた大切な精神である「自然を慈しみ、平和を重んじる文化」も、先の沖縄戦で喪失し、沖縄特有の自然環境や建物等とともに、衰退しつつあります。

そのため、かつての伝統行事を復興・継承するとともに、人々に自然を慈しむ精神を伝えていくことが必要であるという問題意識のもと、①沖縄において生活や文化、宗教的な様々な要素をもつ貴重な資源である「水」を含むこと、②首里城だけ

ではなく本島北部の辺戸までが活動範囲であること、から「お水取り」の儀式を復活させることとしました。

■ 辺戸地区との交流と水源地の保全

首里地区と辺戸地区との交流は、地理的に離れていることから希薄になってきており、特に、辺戸地区は過疎化が進んでいることもあり、他地区との交流による活性化が求められています。

さらに、このような状況の中、1998年（平成10）に突然、この辺戸地区の「お水取り」の水源地に最終処分場の計画が持ち上がりました。しかし、このエリアの重要性を粘り強く提示し、強制執行の際には、沖縄戦を生き抜いた平均年齢75才以上のお年寄り達が、重機に立ちほだかり計画を白紙にした経緯もあります。現在も、村の入会地として地元住民による維持管理を行っています。

■ 「お水取り」復活の目的

このように本活動は「水」という資源を重んじた伝統行事「お水取り」の復活を通じ、先人の「心」と「想い」を伝え、「水」を育む沖縄の自然を守り、さらにその文化を次代へ継承することを目的としています。

- ① 伝統文化の継承：琉球文化の貴重な遺産である世界遺産「沖縄のグスク及び関連遺産群」の中でも沖縄の象徴とされる「首里城」で、儀式を復活させ沖縄の歴史文化、わけでも、先人への畏敬の念と「心」と「想い」を伝えること
- ② 住民の交流・地域の活性化：沖縄本島の中心部である那覇市首里地区と、沖縄本島の北端にある辺戸との距離を超えた住民の交流・連携をよみがえらせ、また本活動を通じ、過疎化の進む辺戸地区の活性化を進める
- ③ 水源地など自然環境の保全・啓発：沖縄北部の貴重な自然環境にある琉球開闢の聖地である辺戸の「安須杜」の「辺戸大川の水」という水資源を保全するとともに、自然を慈しむという意識の向上をはじめ、辺戸大川を取り巻く自然環境の保全を進める

3. 「お水取り」の史実の調査

伝統儀式「お水取り」の復活には、その伝統を把握する必要があります。そのため、「おもろさうし」や「琉球国由来記」（首里王府史書：1713年）、「球陽」（琉球王府史書：1781年）などの文献調査から、往時の「お水取り」の姿を次のように把握しました。

□ 往時の「お水取り」

- ① 旧暦12月20日に王府より使者が辺戸大川へ御水取りに派遣され、王府よりシチャラ嶽、聞得大君からシチャラ嶽、アフリ川、辺戸ノロ火神に供物をお供えする
- ② 大川で水を汲み国王とその子、ならびに聞得大君が長命となるよう辺戸ノロが祈願し、28日に勢頭職の取り次ぎで円覚寺の御照堂に保管する
- ③ 元旦未明、吉方の井川の御水とともに、御内原よりウチクイ阿武志良礼の取り次ぎにより献上され、国王は御日、御火鉢、御額字へ参拝され、正殿2階大広間にて聞得大君御殿より差し上げられた“辺戸の美御水”で御水撫でをなされて、表向き（朝拝御規式）のお勤めをなされる
- ④ 「朝拝御規式」は「御開印之規式」「朝之御拝」「唐玻豊之御規式」と続き、南殿での「南風之御殿御規式」参加者へお茶が振舞われる
- ⑤ 次に御庭での「美御前揃三ツ御飾規式」において、国王が御酒をいただいた後、大通りが行われ、御酒が申口座まで通った頃、国王にお茶が出される
- ⑥ 同様に御太子様、御太孫様へお茶が出され、次に、三司官以下の者に振舞われる

また、文献調査だけでなく、戦前の「お水取り」を知る古老へもヒアリング調査を行いました。しかし、約60年間も儀式が途絶えていたため、往時を知る古老が減っており難航しましたが、首里尚家に仕えていた方のご子息と巡りあうことができ、文献ではわからない儀式の詳細についてヒアリングすることができました。

真栄平房敬氏聞き取り調査概要

平成12年6月7日(水)午前10:45～午後12:45(訂良司の自宅にて)
聞き取り者：山城岩夫

1. 辺戸の若水と参詣について

- 参詣まで毎年正月前に尚家(中城御殿)まで届けられていた。
○中城御殿で、辺戸から若水が届けられたとの知らせがありました。
○水を入れてあるのはカーミグーだった。(佐久間家にあるのと同じ)
○毎年ではないが昭和14年までは、駕籠をかきついで今帰仁と辺戸へ参詣に出る儀式があった。

平成12年8月24日(木)午後1:30～午後4:15(首里城二階殿にて)
聞き取り者：山城岩夫

1. H10・11年の記録ビデオ鑑賞意見について

- ノロの頭は髪結いにジューパーその上に白布巻き冠がふさわしい。
○お供(背上衣)の衣装検討が必要(割れ無し)。
○男褌衣の八巻の紐は耳の後ろを通す。
○神棚の供え物は、鏡餅3段(おし)一対(一番下は普通の大きき上のは徐々に小さめのを乗せる)など検討が必要(文献にある供物など)。
○線香を燃やすのと燃やさない(ヒジュー)と両方供えるのは検討がある。
○八巻位(男)の折願形式は中城御殿で行われていたウニフェー形式(座頭印・立合拳・座合拳)拝を取り入れるのと良いと思う。
○オタカベは漢字言葉では無く、方言言葉でとなえるのと良いと思う。
○糸典にはクエーナ・シヌグ舞い・ウシデーノ踊りなどを入れると良いと思う。
○お先払いに立棒(赤黒六面棒)持ちと、飾り傘(棟部に牡丹唐草の布掛け・骨組みと折骨の接点部に五色の垂れ紐)持ち神人を先導すると良いと思う。
○辺戸にしかない行事だから良いものができると思う。

平成12年9月26日(火)午後2:00～午後4:00(訂良司の自宅にて)
聞き取り者：山城岩夫

1. 辺戸のお水取り行事について

- アサギの廻りは、清めの意味でススキを束ねた物で囲う(3方)と良い。
○御嶽での折願場所は、高いノロ(辺戸ノロ)の座るところは竹柱四本にクロツグ(マリーニ)屋根を葺き、床はクロツグの葉を敷き詰めると良いと思う。
○御嶽周辺や道スネー場所などは、ススキの葉を結んだ柴差し(魔除け)をすれば効果(演出など)がある。
○御嶽での線香は和紙を長さ約10cm幅約3cmに三つ折り拝所側の角を折ってやや斜めに3枚敷いた上に各二平の線香を供える。
○履き物は、アダン葉草履・井草草履・竹筒草履などがふさわしいと思う。
○若水は駕籠(波之上宮のゴハイ)に入れて2人でかついだ方がふさわしい。
○将来は馬を飾ったスネーをすると良いと思う。

聞き取り調査の概要

■ 文献調査からの「お水取り」

□ 琉球文化とお水取り

琉球文化の特徴として、独特な建築様式や伝統工芸、演芸などの他、聞得大君を頂点とする神女組織により、首里城を中心とした祭礼や、各地域に古くから根付く自然と祖先を崇拝する祭礼が、特徴的であり、継承され、琉球王朝の栄華を「心と魂」で支えてきました。

「お水取り」とは、琉球王朝時代、琉球国王の年始清め儀式として執り行われた「お水撫で」という儀式で、使用する水は、琉球開闢の聖地である辺戸の「安須杜」まで使者を送り、安須杜の麗「辺戸大川」の水を汲み、王朝の新年の若水として献上されたと記録されています。国を支配し平穏を保持する力のある水と「おもろさうし」にも謡われ、また、お水取りのときオタカベを唱えるその趣意は、国王とその子供達と聞得大君とその子供達が健康で長命であるよう願うものです。

□ 神話に包まれた安須杜

沖縄本島最北端に位置する安須杜(辺戸岳)は、地元では黄金森と呼んでいるようです。山は四連山となり、東方より宜野久瀨嶽、アフリ嶽、シチャラ嶽、西方がイヘヤと言われています。『琉球神

『琉球国由来記』 首里王府史書(一七二三年)

巻一 王城之公事

一、正月

3 辺戸之御水且吉方御水献上

年内十二月廿日、御水取ニ時之大屋子一人罷越シ、辺戸之巫。御崇有テ、御水取り来テ、同二十八日、当・勢頭御取次、御案内有テ、御水ヲ封ジテ御照堂へ召置、元日之朝、吉方二川之御水、俱ニウチヌクイノ阿武志良礼、御取次献上也。吉方子ノ方時ハ、浦添カヤミ川。丑ノ方、同所アサナ川。寅ノ方、幸地樋川。卯ノ方、井嶽ノ川。巳ノ方、崎山樋川。午ノ方、識名アツ川。未ノ方、識名ケフリ樋川。申ノ方、識名石シヤ川。亥ノ方、沢砥樋川。昔ヨリ此所ノ水取ル佳例也。

行事復活ための参考文献例「琉球国由来記」



安須杜

道記』(1605年)によると、国王慶賀の百果報事として、国頭の深山「アフリ岳」に「アフリ(御涼傘)」というものが現れるといひます。

羽地朝秀の『中山世鑑』(1650年)は、琉球の開闢神話として、神によって一番に辺戸の安須杜を造り、今婦仁のカナヒヤブ、知念杜、斎場御嶽、敷薩の浦原、玉城アマツツ、久高コパウ杜、首里杜、真玉杜の順に地を造り、島々国々の嶽々森々を造ったと伝えています。

この山は、十二世紀から十七世紀初頭のオモロ古歌謡集『おもろさうし』に多く謡われ、喜界島から立つ民俗渡来の様子が謡われたオモロに奄美諸島の島々を渡り、沖縄本島へは最初に安須杜へ着き、その後南下して首里杜へ到達する経路が謡われています。

□ 王府を支えた一つの聖地

『おもろさうし』巻五(二五五)は、「おもろ歌人あかわりが、おもろを申し上げます。今日の吉き日に、安須杜の世を支配する力を持つ躰で水を、

国様に奉れ。」とオモロ研究者によって解釈されています。

歴史書によると、首里王府は毎年12月と5月に使者を遣わして、辺戸大川（神名・アフリ川）から御水を取ってきて、王府に献上したとあります。

12月の除夜に^{きこえおきみうどうん}聞得大君御殿の御火鉢を清め、元上の早朝、吉方に当たる二川の水とともに、国王に献上したとされています。大川で御水を取る時の趣旨は、この御水で国王と王子、^{きこえおきみうどうん}聞得大君が^{ウビナデ}お水撫でをして、長命で幸せであるようお守りくださいますようにと、祈願したようです。又、国王は「お水撫で」の儀式を行った後、元旦行事に参加したことが見えます。

お水撫でに使用された水は「すで水」と呼ばれ、^{こんこうけんしゅう}『混交験集』（1711年）では、「人生誕生の時明方（吉方）の泉川より水をとり撫でさする也、その水をすで水と云也」と説明されています。民間では「シリミジ」と呼ばれ、「^{ふか}鱗化する（シリーン）水」＝再生を可能にする聖水を意味しているようです。

5月には、「稲の穂祭」（ウマチー）の3日前に^{あかた すいどうんち}赤田の首里殿内へ届けられ、^{きこえおきみうどうん}祭り前日の^{りゅうひ}聞得大君御殿では、首里城内の龍樋の清水とともに、御火鉢などを清め、その残りを首里城へ献上し、国王と王子が祈願したようです。古くから霊力あるものとして辺戸大川の水が尊ばれ、王府を精神面から支

えていた様子が伺えます。

4. 「お水取り」の活動状況

一つの家族と数人の有志により始められた、この「お水取り」の取り組みは、現地から発足した復興有志会等、年々、参加者も増え、活動の和が広がっています。

また、お水取りを行う国頭村辺戸地区は、現在の人口がおよそ110人、小学校は生徒数4名と、過疎化の一途を辿っています。このような現地の状況を踏まえ、辺戸地区の住民との理解を優先し、10年の歳月をかけ交流を図って来ています。

■ 現在でのお水取りの流れ

第1回は、辺戸地区から首里までの約100kmを徒歩で運ぶなど、儀式の正統性を重視していましたが、第2回目以降は、多くの人に参加できるように部分的に自動車で輸送するなどの工夫をしました。

かつての「お水取り」については十分に理解をした上で、現在では、活動の継続性や参加しやすさの面からあり方を再考し、下記のような儀式としています。

- ① 大晦日に向かえる2週目前日曜日に国頭辺戸でのお水取り、次の週の日曜日に首里城への奉納祭を開催
- ② お水取り行事は先導役人、ウムイ歌人、祝女、神女（5名）オモロ主取、役人（6名）、区民（数名）

活動状況の変遷

回数	開催年	トピックス
第1回	平成10年	・ 辺戸地区から首里までの約100kmを徒歩で運んだ
第2回	平成11年	・ 新たに円覚寺への奉納と城内への献上セレモニーも加わる ・ 首里城公園では元旦から三日間、「新春の宴」のなかで首里城復元期成会主催によって辺戸大川から提供する水でお茶を煎じ、「美御水ぬお茶会」が開かれ、来園者にお茶が振舞われた
第3回	平成12年	・ 「美御水の御茶会」として、首里城奉納祭を首里城復元の足掛かりを担った任意団体が主催することとなった。
第4回	平成13年	・ 内閣府施策検討委員会の委員長がお水取り祝辞に出席 ・ 内閣府沖繩総合事務局に設置された委員会「琉球歴史回廊構想推進事業」の認定事業とされた
第5回	平成14年	・ 首里城管理団体を母体とする友の会が共催することとなり、京都大学大学院教授の記念講演会が開催
第6回	平成15年	・ 首里のNPO団体がお水取りツアーを組むこととなった
第8回	平成17年	・ 首里城の地番である首里当蔵自治会からお水取りの使者を派遣し、国頭（辺戸）と首里との連携が整った
第10回	平成20年	・ 「首里王府お水取り行事」から「首里城お水取り行事」への改称、「首里王府への美御水の奉納祭」から「首里城への美御水の奉納祭」へ改称 ・ 沖繩南部風景街道パートナーシップが参加

の順で進行

- ③ 先ず、この村の神をもてなす神アサギより行事は始まり、今日のお水取りが無事執り行われることを祈願
- ④ その後一行はウムイを舞い、辺戸大川（神名：アフリ川）へ向かう
- ⑤ 大川ではクバの葉の柄杓で7度お水を取り、壺へ収める。そして人々の健康と長寿を願うウムイを謡き、オタカベ（祝詞）を唱え祈願
- ⑥ 次に神の道を昇りシチャラ嶽（神名：ステル御イベ）向かう。シチャラ嶽では万国の安寧と太平、五穀豊穰、航海安全を祈願
- ⑦ 次に神の道を降り祝女殿内へ向かう。祝女殿内火ノ神では祖先へ感謝と無事届けられることを祈願し、首里へ向け出発
- ⑧ 首里城奉納祭は吉方（浦添市沢岷樋川）のお水取りを皮切りに一行は首里公民館を出発し、首里城円覚寺（第二尚氏菩提寺）へ向かう
- ⑨ 円覚寺では辺戸大川の水と吉方の水を合わせて供え、歴代国王への奉納を祈願
- ⑩ 次に首里クエーナ謡に導かれ久慶門より首里城内へ入城し、首里城正殿へ向かい石畳道を昇る



③ 神アサギでウムイを舞う



⑤ 大川での祈願

- ⑪ 女官ウチクイ阿母志良礼が正殿1階中央で鎮座する東御内原では国王とその子と家族が長命となるようオタカベを唱え、お水献上取り次ぎの儀を行い、ウチクイ阿母志良礼が大庫理がある正殿2階へ奉納し新年を待つ



⑥ 神の道を道ジュネー



⑦ 首里からの使者へ渡す



⑧ 円覚寺へ向け出発



① 首里城正殿1階で取り次ぎ

5. おわりに

資金の確保や企画、準備、実行など、多くの人の努力で、この「お水取り」を10年継続することができました。

平成20年の第10回を契機に、この儀式の名称を「首里王府お水取り行事」から「首里城お水取り行事」へ改称しました。この改称により首里城文化が甦り「首里城」という世界遺産の知名度により、本活動をさらに広く世界へ発信できることを期待しています。

また、お水取りを行う国頭村辺戸地区はまだ過疎化の一途を辿っています。今後は地域地理や自然・文化を活かした定住社会の創造に向けて、本活動の和をさらに県民の間に広げ、沖縄文化の発展と地域の発展・活性化のために、活動を推進させていきたいと思っております。



首里城御内原にて



2008.12.28 沖縄タイムス (朝刊)



2008.12.29 琉球新報 (朝刊)



2008.12.29 沖縄タイムス (朝刊)

新聞記事に掲載

首里まちづくり研究会理事長 石崎雅彦
 国頭村辺戸区長 石原昌一
 首里当蔵町自治会長 宮城政雄
 浦添市沢岬 玉城弘
 アトリエ朝大 美良樹吟呼
 首里王府お水取り行事実行委員会 山城岩夫
 沖縄南部風景街道パートナーシップ代表 真栄里 泰山